

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 11号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十四年十一月
第十一号

< 2012 年 11 月 >

古賀 順子

アンジェ城のタペストリー

「聖ヨハネの黙示録」

パリ・モンパルナス駅 8 時 52 分発ナント行き TGV に乗って 1 時間半、秋の一日をアンジェの街で過ごしました。ロワール河古城巡りで最西に位置するのがアンジェ城。正確には、ロワール河支流のメヌ河を見下ろし、白黒二層の堅固な外壁が特徴的な中世の戦いの城です。

9 世紀末、通称「赤毛のフルク」がアンジュー公として台頭し、子孫たちは婚姻によってメヌ・トゥーレーヌ地方のみならず、イギリス、ノルマンディー地方、アキテーヌ地方など、その領土を拡げていきます。13-15 世紀のアンジュー公は、ナポリやシシリアをも治める中世の一大権力を築いた家系です。アンジェ城は、13 世紀末パリのサント・シャペルを建立した聖ルイ王（ルイ 9 世）が現存する城壁を築き、聖ルイ王の母ブランシュ・ド・カスティーユが聖ルイ王成人まで執政したところでした。その後、フランス善良王ジャンの次男アンジュー公ルイ 1 世が、装飾用として 1373 年から発注し、1382 年に納品されたのが「聖ヨハネの黙示録」のタペストリーです。

幅 6m（上下二段の縁取り）、全長 140m を超える中世一大きな織物です。6 つのパーツから成り、赤と青の下地を上下左右の交互に配し、大きな人物 1 人と 14 の場面がパターン化されています。大きさだけでなく、毛織物としての技術や質の高さ、美しさ、絵画にも劣らぬ表現の豊かさにおいて、他に例がありません。600 年の歳月を経てかなり色褪せていますが、保存状態の良い裏面からは、その色（赤、青、金色）が当時いかに美しかったかを知ることができ

ます。あまりに大きく、切断され、散逸し、教会の椅子に張られたり、絨毯に使われたりと不遇な運命に遭いながらも、19 世紀に入り、残った部分が再構成され、1954 年から特別のギャラリー（40 ルックスの照明なので写真撮影は無理、目が慣れるのに時間が必要）で一般公開されています。

新約聖書の最後に記された「聖ヨハネの黙示録」は、使徒ヨハネがエーゲ海に浮かぶパトモス島で神の啓示を受ける場面から始まります。神の国を象徴する 7 つの教会、天使を表す 7 つの星、7 つの金盃、嵐や災害、地震、天変地異、イナゴの大群襲来など、7 つの出来事を予告する 7 つのトランペット、神の普遍性を示す数字「7」と悪魔を象徴する「6」が、物語形式でタペストリー全体に織り込まれています。

「2 人の証人」「7 頭の竜」「地と海の悪魔」など、たくさんの逸話が登場し、簡単には理解することができません。キリスト教徒ではない私が「黙示録」を正しく理解できたかどうかは疑問ですが、このタペストリーは見る人を魅了します。14 世紀後半の不幸が、現世の不幸として描かれています。悪を象徴する「黒い馬の騎士」は、百年戦争でフランスと敵対するイギリス王エドワード 3 世とその兵隊の姿で織られています。当時猛威を振ったペストが暗示されています。「黙示録」に予告される現世の不幸は、いつの時代にも形を変えて表れ、神の言葉に耳を傾ける者だけが死んでもその魂は復活する、死は生へとつながる、と説いているのではないかと思います。

アンジェ城は、城壁だけが今日まで残りました。シュノンソーのように優雅な姿を留める城は確かに美しいですが、僅かに残された部分から残らなかった多くの部分を想像することで、時間と空間に縛られない世界へ行ける気がします。

アンジェ城外堀の庭



アンジェ城の外堀



(撮影：古賀 順子)